

(能)

ツレ 藪 克徳
子方 渡邊真之助
シテ 藪 俊彦

竹

雪

ワキ 北島 公之

間 能村 祐丞
中尾 史生

大鼓 飯嶋六之佐
小鼓 河原 清
笛 片岡憲太郎

休憩 二十分

(連吟)

清經

(狂言)

寺田 茂
中村 清
笠間 啓
米島 和秋

鐘の音

太郎冠者 炭

哲男

主人 鍋島 憲
後見 山田 讓二

(能)

トモ 谷 清士
小蝶 福岡 聡子
頼光 広島 克栄
シテ 佐野 玄宜

土

蜘蛛

ワキ 平木 豊男
ワキツレ 北島 公之
ワキツレ 苗加登久治

間 炭 光太郎

大鼓 田中 一義 太鼓 徳田 宗久
小鼓 住駒 俊介 笛 室石 和夫

後見 渡邊 茂人
松田 若子
松本 博
木谷 哲也

地謡
山本 貢伸 佐野 弘宣
船本 嘉人 島村 明宏
大澤 永靖 高橋 憲正
館 聖 川島 英治

能 竹 雪 (たけのゆき)

越後の国の住人直井の左衛門何某(ワキ)は妻を離別して長松という所に置き、二人の子の内姉を母に添え弟の月若を引き取って新しい妻を迎えました。何某は近くへ参籠する間、継母に月若をいたわるよう、雪が降れば竹の雪を使用人に払わせよう指示して出掛けます。継母に叱られた月若(子方)は長松の家に行きますが、変わり果てた身なりを母(前シテ)が嘆くところへ使いが来て月若は連れ戻されず(中入)。継母は月若の着物を脱がせて竹の雪を払わせ凍死させます。その知らせを受けた長松の母(後シテ)と姉(ツレ)は直井へ行き泣き泣き竹の雪を払って月若の死骸を探し出します。そこへ何某が帰り合わせ姉の恨み言を聞いて事態を初めて知ります。父母共に命を惜しまず嘆く姿を天が哀れみ、「竹林の七賢が幼子を返してやるぞ」と空から声が聞こえて月若は蘇生しました。親子四人の再会を機に直井の家は仏法流布の寺となし、二世安楽の深い縁が結ばれました。

狂言 鐘の音 (かねのね)

黄金作りの太刀の値段を聞いて来いと命じられた太郎冠者は、鎌倉の諸寺の鐘の音を聞いて回ります。叱られたのは当然ですが、主人の御機嫌を直そうと、この顛末を謠に作ってまた叱られます。その謠に曰く、ジャモウモウと鳴った寿福寺の鐘の音を諸行無常と聞き、円覚寺のハアンは生滅法、極楽寺のジャグハンジャグハンは生滅滅已、建長寺のコンは寂滅為楽と響いたとか。こういう才覚の、本来の仕事への活用法を、工夫したいものです。

能 土 蜘蛛 (つちぐも)

大江山や羅生門の鬼退治で知られる源頼光(ツレ)は病床にあります。侍女の小蝶(ツレ)が典薬の頭から薬を持ち帰り見舞いはしても、頼光は死期を待つ衰弱ぶりです。深更に及び、怪しい気配がして僧(前シテ)が訪れたかと思うと、僧は蜘蛛の糸を千筋に投げ頼光の五体を締め付けて苦しめます。化生と見て取った頼光が宝刀膝丸で斬り伏せる(以後宝刀を蜘蛛切と改名します)と、大きな叫び声を残して僧の形は消えます(中入)。急を聞いて駆け付けた独武者(前ワキ)は劍の奇特を称え、血の跡をたどって化け物退治に出掛けます。独武者ら(後ワキ・立衆)がたどり着いたのは葛城山に住む土蜘蛛の塚でした。塚を崩し石を裏返すと火水を放つ鬼神(後シテ)が正体を現します。鬼神は大昔から葛城山に住む土蜘蛛の精魂を名乗り、君が代に障りをなすために頼光に近づいたといっています。蜘蛛の糸を投げて抵抗する土蜘蛛を、独武者率いる官軍が苦戦しながらも劍の威徳で平らげます。

(金沢大学人間社会学域教授 西村 聡)

次月の予定 平成二十九年十二月三日(日)午後一時始

(能) 遊行柳 (狂言) 茶 壺 (能) 舍利